

【第1分科会】提案（A） 「主体性」の伸長と「基礎学力」の向上に向けたカリキュラム・マネジメントの推進 ―教育課程の編成・評価・体制整備の一体的な改善を通して―

[助言者]	広島市教育委員会	指導第二課長	土居 達司
[発表者]	広島市砂谷中学校	校長	村山 友一
[司会者]	広島市東原中学校	校長	檜山 枝美
[運営委員]	東広島市もみじ中学校	校長	大島 美紀
[記録者]	東広島市磯松中学校	校長	石川 憲之

1 はじめに

本校は、広島市の北西部にある湯来町に位置する1学年25名程度の小規模校である。生徒は素直で優しく、与えられたことには取り組むが、主体性は乏しい。固定化された人間関係の中で、経験や興味関心の幅が小さくなりがちで、社会的事象への関心が低い傾向にある。また、小学校時より家庭学習の時間が不十分で、基礎学力が定着していない。令和12年度より、町内の4校が統合し、新しく小中一貫教育校が開校する予定である。本研究では主として令和5年度からの3年余りの学校経営について扱うものとする。

2 研究の目的・方法・検証計画

（1）研究の目的

本校の長年の課題である「主体性」「基礎学力」の向上に向けて、組織的に取り組むために効果的なカリキュラム・マネジメントの充実に向けた在り方を検証する。

（2）研究仮説

本校の教育課程において、「教育の内容等を教科横断的な視点で組み立てていくこと」「教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと」「教育課程の実施に必要な人的または物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくこと」の3つの側面をもとに、教育課程の編成を工夫し、実施すれば、生徒の主体性、基礎学力が向上するであろう。

（3）検証計画

全国学力・学習状況調査回答状況	毎年1回（第3学年4月）	◎
児童生徒学習意識等調査	毎年1回（第2学年6月）	○
学校評価アンケート	毎年2回（全学年7月、12月）	△
学校独自の調査（スケジュール手帳、じみかtime等）	毎年1～2回（全学年）	◇

3 研究計画（◎○△◇は上述の検証実施時期を示す）

年度	学校全体に係る取組・動き	生徒に係る取組
5	4 広島市指定校（特色ある教育実践研究校） ◎ (4)	4 きらりカード
	学校スローガン制定 ○△◇ (6)	12 修学旅行商人体験
	1 次年度年間計画修正・テストの観点確認 △◇ (12)	2 手帳導入準備

6	4	学校教育目標変更・広島市指定校（授業改善実践研究校） ◎(4) 1・2学年合同野外活動 ○△◇(6) 部活動再編 △◇(12)	4 10 11	スケジュール手帳導入 映画祭 30分学習・振り返り開始
7	6	2・3年生合同修学旅行 ◎(4) ○△◇(6) △◇(12)	4 10	じみかtime 名称決定 映画祭
8	4	文部科学省指定校（教育課程柔軟化サキドリ研究校） 広島市指定校（先行カリキュラムデザイン研究校）◎(4) 地域貢献部発足 ○△◇(6) △◇(12)	4 10 10	朝じみかtime 映画祭 小中合同文化祭

4 研究実践

（1）スローガンの設定及び学校教育目標の見直し

令和5年度に前校長が、赴任直後に生徒の状況を見て「他人と過去は変えられない 自分と“みらい”は変えられる」というスローガンを設定した。令和6年度は学校教育目標を「豊かな心をもち、主体的にたくましく生きていく生徒を地域とともに育てる」から「創造 貢献 主体」に変更した。

（2）教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと

① 令和5年度

広島市教育委員会の研究指定を受け、「特色ある教育実践研究校」となり、総合的な学習の時間（以下「総合」）及び道徳科を中心として研究を進めることになった。総合では、「湯来町みらい計画」と称し地域を題材とする単元を設定し実施した。実社会の事象や社会課題を扱う本単元ではNPO法人峠の森保全の会及び砂谷牧場を積極的に活用し、竹林整備やメンマづくり、イチゴ農園整備を行うなど外部連携を図った。道徳科では自主教材の作成や、総合や各学校行事との関連を図るなどして、道徳教育の補充深化統合を目指した。

修学旅行は、前の東京方面から関西方面に変更することになり、大阪で商人体験を設定した。これまでの文化祭（校内）での販売と比較して、大阪の商店街で実際に通行人に話しかけ説明をするなどしてメンマを売り切ることは、生徒にとってはかなりのハードルであった。湯来町を紹介するパンフレットやメンマ等のポップやチラシ、パッケージの工夫を行うなど、湯来町の魅力発信という総合の探究課題に相応しい内容になった。

また、2月に実施した総合に関する校内研修会では、総合の各学年の系統図の見直しを行った。その結果、3つの小単元で構成する学年の流れ、1～3学年の流れに鑑みると、修正を図る必要があることが分かった。さらに、学校全体の系統図としてまとまるように、年間通じて3つの小単元のうち、2つは地域をテーマに、最後の1単元は、それらを通して自分を振り返るように共通して設定した。さらに第1学年：湯来町の過去、第2学年：湯来町の現在、第3学年：湯来町の未来とし、学習内容も、第1学年では、自然環境や人、第2学年では産業・職業・組織、第3学年では、まちづくりや地域活性化の視点から探究できるように設定した。

② 令和6年度



図1 スローガンと学校教育目標

広島市教育委員会の研究指定を受け、「授業改善実践研究校」（総合）となった。

総合においては、以下の図 2 のように教科担任が総合の際に教科の視点で学習内容を指導する時間が増えたことで教科横断的な指導が充実し、教科内容の定着が図れた。

また、懸案となっていた「湯来町の福祉環境について知る」の学習内容は、第 1 学年及び第 2 学年の家庭科並びに第 3 学年の総合小単元 1 において学習することにした。

年	小単元名	学習内容	教科等
1	1 湯来町の歴史を学ぶ	50 年前と現在の地図を比較	社会
	2 湯来町の環境問題を考える	竹を使った作品づくり	技術・家庭(技術分野)
2	2 湯来町を支える様々な仕事から学ぶ	保護者・事業所の方へのインタビュー、内容のまとめ方	国語（中国新聞 NIE）
	2 湯来町を支える様々な仕事から学ぶ	アンケート集計結果のデータ分析	数学
3	2 湯来町の活性化に向けて取り組む	湯来町に関する動画作成	技術・家庭(技術分野)

図 2 総合的な学習の時間の学習内容と教科の関連

③ 令和 7 年度

総合の全体計画に大きな変更はない。ただし、数学科においては、これまでは第 1 学年の 2～3 月に行っていた「確率・統計」の学習を 4 月に行うことで、総合において収集した情報を整理・分析する場面で活用できるようにした。

（3）教育状況の実施状況を評価し、その改善を図っていくこと

① 令和 5 年度

家庭学習が定着していない生徒がいることが全国学力・学習状況調査や児童生徒学習意識調査等で明らかになったため、家庭学習を改善していく必要があると考えた。当時の教員はまだ、定期テスト週間を中心に課題を提出させる指導に重点を置いていたため、基礎学力の向上は難しく、抜本的な改革の必要性を感じた。そこで生徒自身に家庭や休日を含むスケジュール管理や家庭学習が必要であると理解させることが本質的な課題解決につながると考えた校長は、1 日のスケジュールや 1 週間の目標ややるべきこと、振り返り等が記入できるスケジュール手帳の導入を提案し、1・2 学年の生徒に対して試行期間を 2 月に 3 週間設けた。教員は有効性を感じるものの「書く量が多くて生徒の実態にそぐわない」「途中からの導入は混乱する」「従前のものより高価」という理由で在校生に使用することに賛同は得られなかった。そこで令和 6 年度入学生から使用することとした。

また、課題の提出にのみとられる指導とならないよう、自己調整と粘り強さについて各教科において記述で評価する場面を設けることを教員に予告した。併せて、定期テストの年間の実施回数を 4 回から 3 回に精選する計画を立てた。

② 令和 6 年度

引き続き家庭学習が定着していない生徒が多いことが課題であった。学校内外の行事や研究会が終了した 11 月より、課題の改善にどう取り組むかを学年会や分掌会で話し合うように指示した。

教員からは、「まずは、実際に、時間を取り指導をしなければ自分だけで取り組むのは難しいのではないか」「そのための時間の保障がほしい」といった意見が出たため、掃除時間を週2回削減し、実際に30分学習する時間（水曜日）と、次の1週間を見通した目標設定、時間割や提出物の確認、振り返りをする時間（金曜日）を設定した。新1年生は新しく導入したスケジュール帳で、2・3年生も従前の連絡帳の欄を活用して金曜日にはしっかり書かせた。

③ 令和7年度

目標設定と振り返りを行う時間を正式に日課表に組み込み、本校のスローガン「自分と“みらい”は 変えられる」の頭文字をとって「じみかtime」と名付けた。じみかtimeには学年教員が全員で指導に当たることとした。30分学習をするとシールを貼るなどして見える化する、学年交流をするなどして、徐々に家庭学習をする必要性が浸透してきたが、まだ十分とはいえない。

④ 令和8年度

文部科学省の研究指定を受け、「教育課程柔軟化サキドリ研究指定校(以下サキドリ)」となって、じみかtimeをさらに有効に活用できるよう、実践を始めたところである。

(4) 教育課程の実施の必要な人的または物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくこと

① 令和5年度

1小1中でクラス替えがなく人間関係が固定化しているため、年間を通じて多くの来校者に来ていただけるように努めた。その際、生徒の頑張りを地域の方から直接評価していただくことが効果的だと考え、写真と共に掲示する（きらりカード）取組を令和5年度から始めた。なるべく個人に焦点をあてて書いていただくことで、カードを贈られた生徒は大変喜び、次の活動への意欲をもつとともに、主体性も向上しているように感じられる。この取組は地域連携を特徴としている本校を象徴するものとして継続して実践している。

<総合で協力していただいている団体等>

NPO 法人峠の森保全の会、(区役所職員、市役所職員) 高原の里「砂谷」会、砂谷牧農、町内各職場体験事業所、湯来南公民館職員、百歳体操に参加している地域住民（高齢者）、湯来ふるさとプロジェクト 等

<総合・教科・学校行事等で指導や講義等して下さった方>

プロモーションディレクター、中国料理・料理人 新聞記者、被爆体験伝承者、幼稚園長、保育園長、公民館長、郵便局長、湯来交流体験センター長、商人体験コーディネーター（修学旅行）、バスガイド、市教委職員、建築事務所職員 等

<その他>授業参観した地域住民、保護者、教員 等



図3 きらりカード（拡大・全体）とそれを見る生徒たち

② 令和6年度

前述のように、年間計画を見直し定期テストの回数を4回から3回（中3は2回）に減らすとともに、評価の回数も3回とした。野外活動及び修学旅行については、交通費や教員配置の観点から2学年合同・隔年で行うことで負担軽減を図ることにした。また、単独でチームが組めない野球部、バレーボール部を夏の大会をもって廃部とし、7月よりバドミントン部を発足させた。部員数がある程度確保でき、顧問及び部活動指導員も2～4名となり余裕が生まれた。また、地域の団体より、映画祭の立ち上げと運営等への協力依頼があり、総合で湯来町の魅力を伝えるための動画を作成し発表することになった。動画作成に当たっては地域団体より謝金を捻出していただき、プロモーションディレクターを招聘することができた。

③ 令和8年度

文部科学省の研究指定（サキドリ）、広島市教育委員会の研究指定（先行カリキュラムデザイン研究校）を受けた。各教科を3～7時間削減し、自学や目標設定・振り返りをするじみかtimeを設定した。先行カリキュラムデザイン校として、じみかtimeの充実や小中連携・総合を推進する研究推進リーダーを任命し、小学校と共に研究の推進に努めている。

5 分析と考察

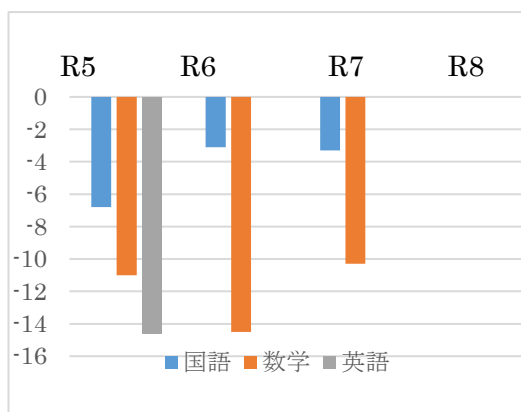


図4 全国学力・学習状況調査結果（全国と本校の比較）

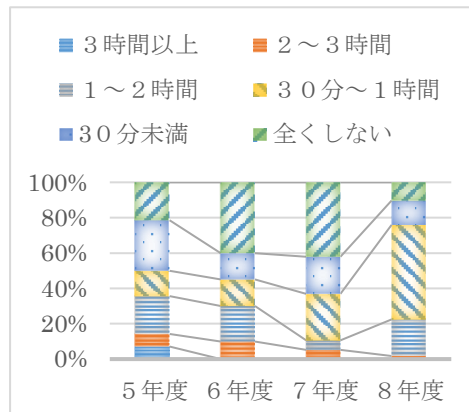


図5 平日の学習時間

5 じみかtime（金・振り返り）を通しての自分の成長はどんなことですか。5つ以内選びましょう。 48件の回答

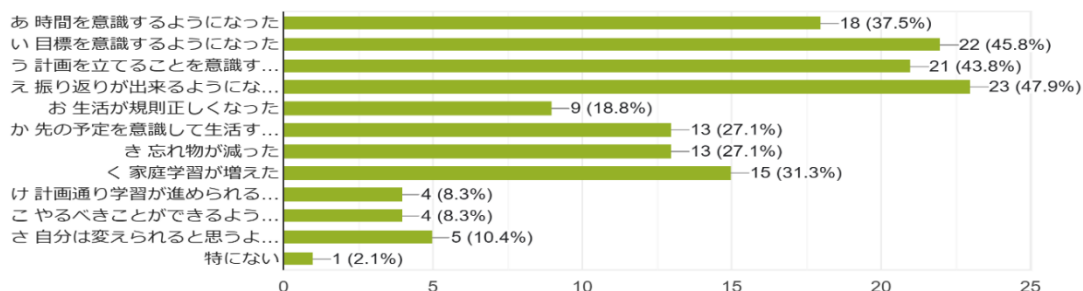


図6 じみかtimeを通しての自己の成長（生徒アンケート）

2 じみかtime（水・30分学習）を通しての自分の成長はどんなことですか。5つ以内選びましょう。
48 件の回答

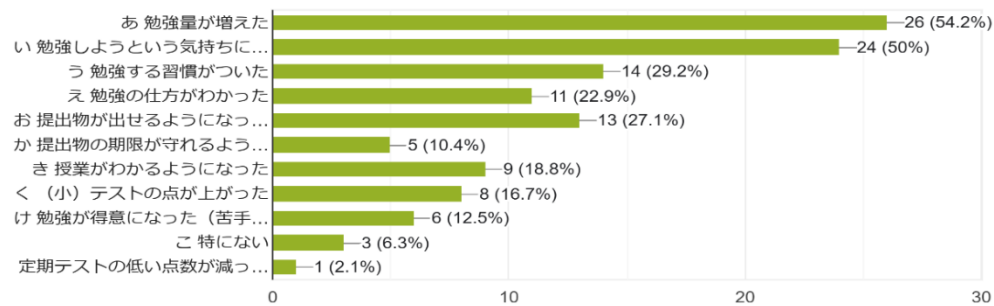


図7 じみか time を通しての自己の成長（生徒アンケート）

図4からは、依然として全国との差はあるものの、国語においてはその差が縮小していることが分かる。また、図5からは、本年度、平日の学習時間に大きな変化が表れつつあることが見て取れる。特に「全くしない」と回答した生徒は、令和5年度以降で最小の10%となった。

図6からも、スケジュール管理や目標設定、振り返りをするすることで、自分の成長を感じていることがわかる。「特にない」と回答した生徒は1名であり、ほとんどの生徒が何らかの手ごたえを感じたと読み取れる。同様に図7から、30分学習を授業中に行うことで家庭学習のきっかけになったことが読み取れる。ただし、30分学習の内容については、「提出期限が近いものや過ぎているもの」と答えたり、「その時の気分次第」と答えたりしており、計画を立てて学習を進めているものはまだ限られている。また、この時間で満足し家庭での自学につながらない生徒も多く、今後の課題と言える。

6 成果と課題

- カリキュラム・マネジメントの3つの側面を意識し、3年間かけて学校体制を構築し徐々に生徒の主体性や学力が向上してきている。
- 教員が課題意識をもち主体的に解決策を考えられるように、物的・人的体制を整えながら、手立てを考えてきた。その際、前年度より提案を行い、次年度実行に移せるように心がけた。また小規模校ゆえに、全校で共通して行うことを意識し、ある程度定着すると、縦割り活動を活用して、より質の向上が図れるようにした。
- 家庭学習の定着は十分ではなく、自主学習の内容も提出物への対応にとどまる。
- 中学校での取組に限界がある。今後はさらに小学校との連携を密にし、小学校段階から家庭学習の定着を図る、夢や目標をもたせるなど、引き続き取り組む必要がある。

7 おわりに

本校の取組を通して、教職員と生徒が目指す姿を共有し、カリキュラム・マネジメントを工夫し続けることが、生徒一人一人の自己肯定感を高め、自律的な学習者を育てる一助となることを実感した。今後は、小学校段階からの家庭学習の定着を図るべく、一層の小中連携が必要である。本校におけるカリキュラム・マネジメントの試行錯誤のプロセスが、同様の課題をもつ諸学校における教育実践の一助となれば幸いである。